

### Ⅲ 黒髪南地区の調査

## 1. 工学部実験棟新営に伴う発掘調査（9412調査地点）

### （1）調査の目的と経過

#### a. 調査地と調査経緯

今回の調査地区は、黒髪キャンパス南地区工学部1号館の南側にあたり、共同実験棟および中庭として利用されていた場所である。本調査は工学部研究実験棟新設工事に伴う発掘調査であり、総調査面積は東西49.2m、南北33.8mで約1663㎡となる。しかしながら旧実験棟として利用されていた部分はその建造物の基礎が地中深くにまで及んで、埋蔵文化財の遺物包含層および遺構が破壊されていることを確認したため、精緻な調査は必要ないと判断した。したがって実際に発掘を行った範囲は、かつて中庭であった部分（東西22m・南北33.8m）であり、その調査面積は743.6㎡である。

試掘の結果、遺物包含層は地表下60cmから約60cmの厚さにわたって堆積していることが判明した。しかし調査区においても旧建築物および樹木移植による攪乱、さらに鉄筋コンクリートの解体片等の産業廃棄物が埋められているため、遺物包含層がかなりの広範囲にわたって乱されていることが判明した。したがって包含層内における遺構の確認は非常に煩雑で不可能に近いと判断し、上層を大部分除去し、包含層下の遺構が掘り込まれる面において遺構の確認を行う方向を採った。

#### b. 調査の経過

- 8月30日 樹木移植開始。
- 9月8日 重機による表土層除去。旧建築物の基礎などの産業廃棄物の除去。包含層の保存状態が非常に悪いため、遺構掘り込み面にて遺構確認を行う方針を立てた。
- 9月12日 作業員投入。攪乱部分を徹底的に除去。
- 9月22日 攪乱部除去終了。
- 9月26日 残存する包含層の掘り下げ開始。ピット内より土製印出土。
- 9月29日 雨天のため中止。
- 10月5日 調査区南側で溝状の遺構確認。調査区北東部分の一角に包含層の落ち込む部分を確認（以下北東地区）。
- 10月7日 溝状遺構内より初殻を検出。遺構確認できず。同遺構内にて集石を検出。
- 10月11日 北東地区において遺構確認のためトレンチを掘る。土器片が大量に出土。住居址3基を確認。
- 10月12日 雨天のため中止。
- 10月13日 北東地区においてピットを検出。
- 10月14日 焼土などの痕跡を検出。住居には伴わない。
- 10月19日 図面作業開始。溝状遺構内の集石より採図。遺構配置図作成。
- 10月21日 雨天のため中止。
- 10月24日 層序確認のため3箇所を深掘りする。
- 10月26日 土層断面図作成。住居址5基を検出。かなり破壊されている。
- 10月27日 住居址さらに2基確認、検出。
- 10月28日 遺構検出状況・全景写真撮影。図面が完了した住居より地山整形面まで掘り下げる。
- 10月31日 掘り下げを完了し、採図を行い、調査を終了。

1. 工学部実験棟新営に伴う発掘調査

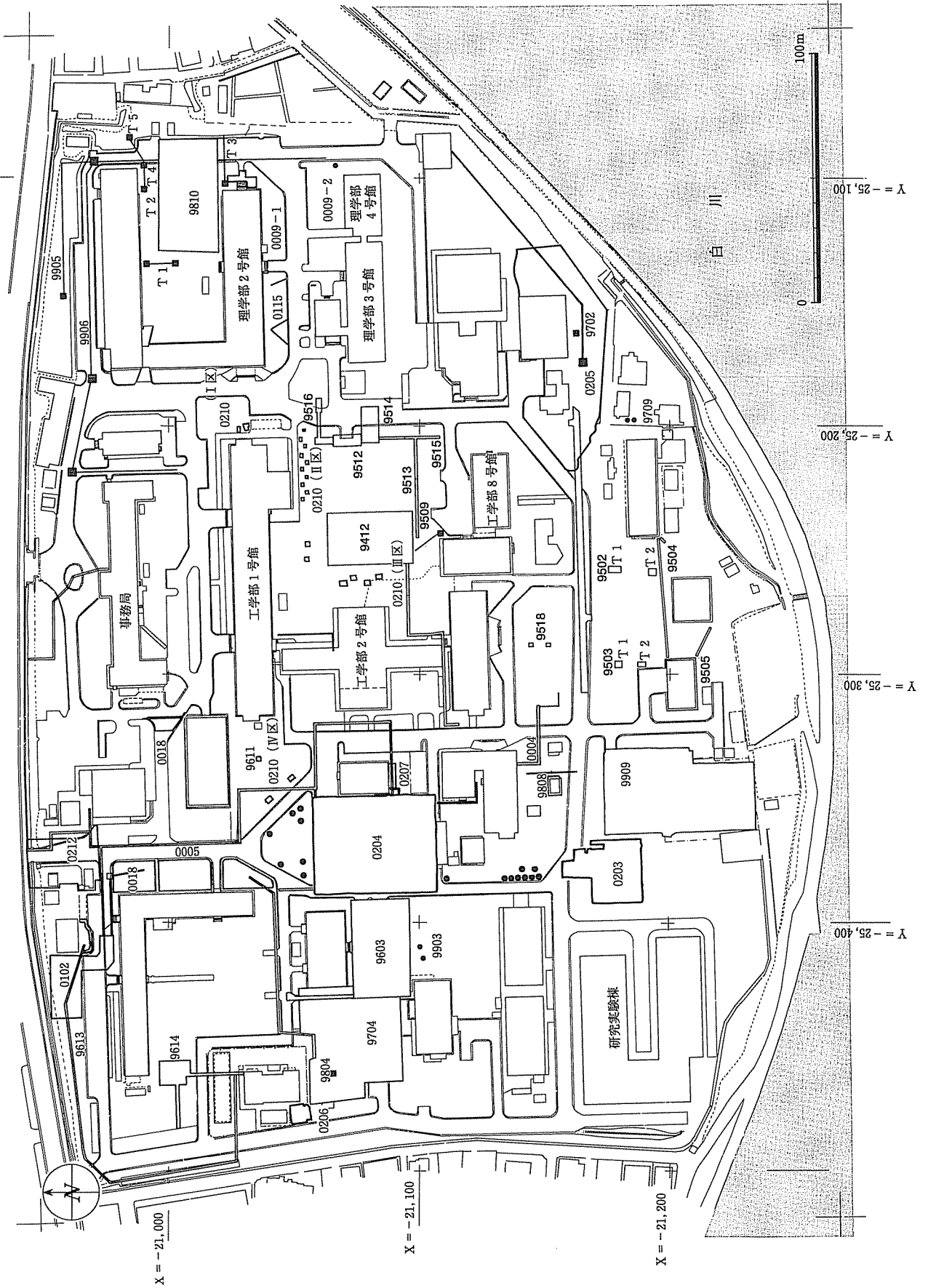


図16 黒髪南地区における既往調査地点と9412調査地点の位置図 (1/2000)

c. 調査の組織

調査員：原田範昭（現熊本市文化課）

事務担当：矢野希久代

発掘作業員：相川奈美・飯田孝俊・稲田和加・今村佳子・岩谷史記・内菌拓也・大塚宏之・大坪志子・岡部是央・岡本久美子・甲斐美紀代・甲斐田末男・川野博之・清田志野・蔵富士寛・古賀敬子・後藤郁子・小深田ナオ・佐藤タエ子・澤田まり子・柴田やよひ・高崎芳美・高松幸一・田崎末人・田中末光・田中聡一・田中大介・田中レイ・土田ちえみ・中嶋由起子・中村さつき・中村哲史・橋本みどり・花田誉宣・林田恵子・春木藤美・番山明子・東真一・藤田實千代・藤岡泰江・古屋俊英・本田晶子・本田浩二郎・槇林啓介・益永武史・松井昭子・松浦一之介・松里健一・丸岡恵子・美浦雄二・村山志穂・山口健剛・山下直哉・吉岡和哉・若杉あずさ・若杉竜太

整理作業員：甲斐美紀代・古賀敬子・柴田やよひ・田中レイ・土田ちえみ・橋本みどり・林田恵子・春木藤美・藤岡泰江・松井昭子

(2) 調査区の基本層序 (図17)

今回の発掘調査において確認された本調査区の基本的な層序は以下のとおりである。

- 1層：褐色土層 (10YR6/8) 表土及び攪乱層である。2度の整地が施されている。瓦・石など多く含む。厚さ80~100cm。
- 2層：a 黒褐色土層 (10YR3/2) 二次堆積の包含層である。焼土粒・砂粒・小石など多く含む。乾燥した質感で、固くしまっている。厚さ30cm。  
b 黒褐色土層 (10YR2/2) 一次堆積の包含層である。焼土粒などわずかに含む。やや湿気

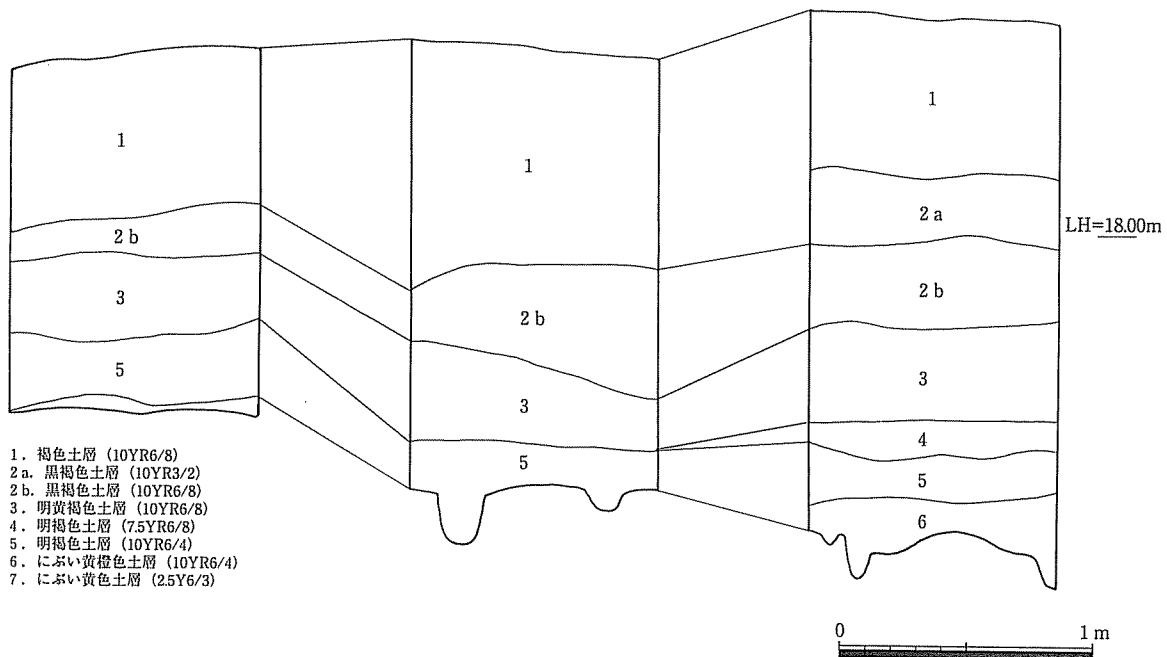


図17 9412調査地点土層断面実測図 (1/30)

1. 工学部実験棟新営に伴う発掘調査

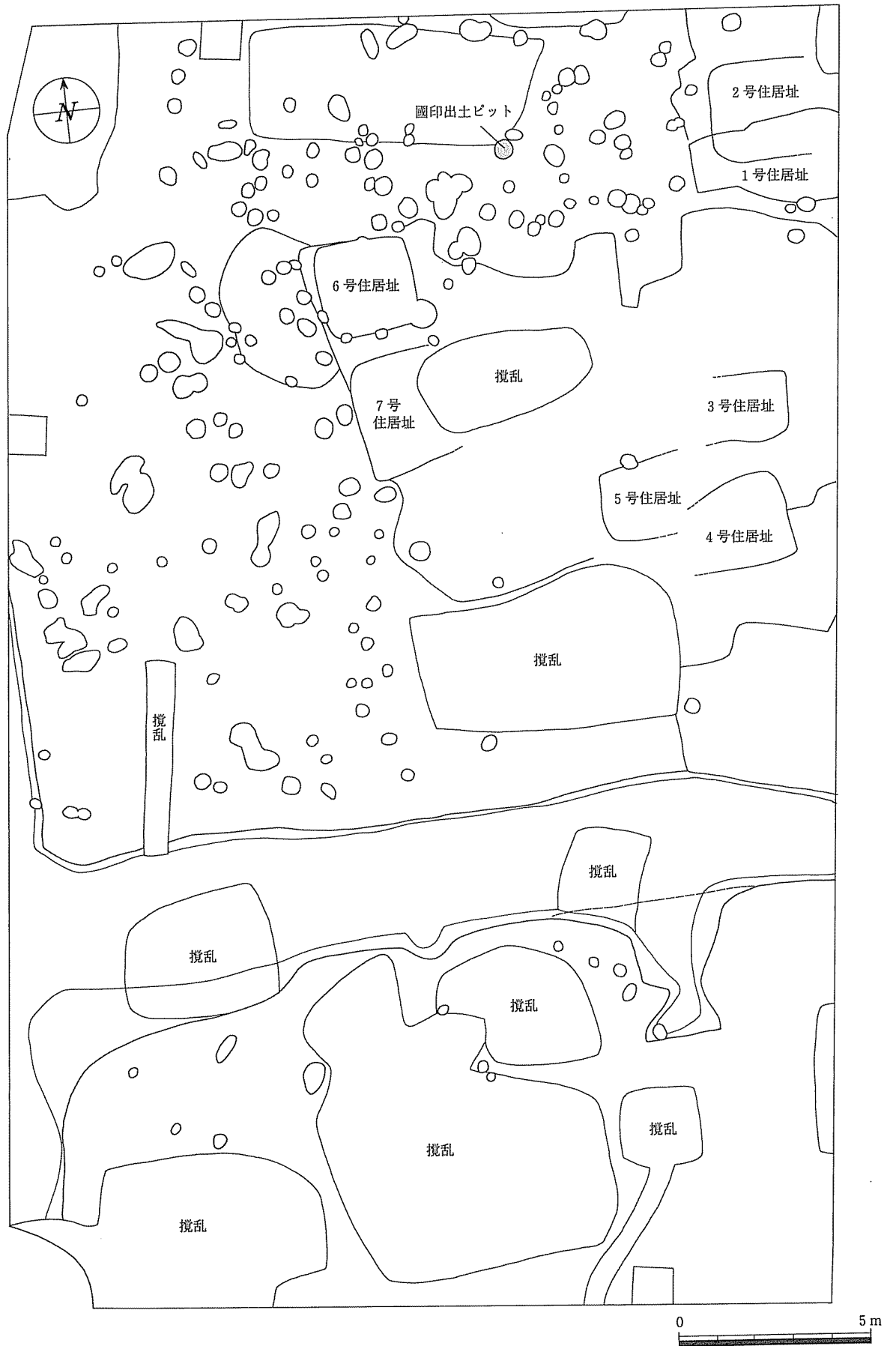


図18 9412調査地点遺構配置図 (1/150)

のある質感で、粒子が細かく、柔らかい層である。厚さ15～50cm。

3層：明黄褐色土層（10YR6/8） 遺構はこの層に掘り込まれる。ローム層である。混入物はない。やや乾いた質感で粒子は細かい。厚さ20～40cm。

4層：明褐色土層（7.5YR5/8） 質的には3層と同様だが、色調が異なる。層と同質の塊がブロック状にはいる。厚さ15cm。

5層：明黄褐色土層（10YR6/6） 質的には3層と同様で、さらに固くしまる。混入物はない。厚さ20cm。

6層：にぶい黄橙色土層（10YR6/4） 3層同様の土質で4層がわずかに混入する。厚さ30cm。

7層：にぶい黄色土層（2.5Y6/3） 岩盤である。非常に硬質である。表面には細かい凹凸が激しい。

### （3）検出遺構

今回の調査では、竪穴式住居址7基、溝状遺構1条、集石遺構1条を検出した。溝状遺構が近世以降のものである以外は古代のものと思われる。竪穴住居址は破壊を受け詳細の明らかでないものを含めて計7基が検出された。本調査区においては遺物包含層の保存状態が不良であったため、包含層下のⅢ層上面まで重機による削平を行い、Ⅲ層上面において残存する遺構の確認を行った。調査区北東部分にⅢ層を掘り込んで包含層が保存される一帯があり、住居址はすべてこの地区より検出された。上記の一帯は南北14m、東西14mにわたってL字状に確認でき、面積は約135㎡におよぶ。本来は今調査で検出した住居数以上の住居址が存在したものと推定している。

#### 1号竪穴住居址（図19・図版12-3）

調査区の北東隅に位置する。一部旧建築物の攪乱による破壊を受けるが、基本とする平面プランは2×2mの隅丸方形を呈する。また住居西側に1.2×1.2mの方形の突出部が付設される。住居内におけるものと同様の硬化した床面をもち、壁体も一連のものである。したがって方形を主とする通例とは異なるが、1号住居址の一部として認定している。住居入口部分に相当するのではないかと考えられる。主軸はW-5°-Sである。残存する壁高は15cmである。柱穴は突出部西端に1個、住居外南壁際に1個を検出したが、全容は明らかではない。柱穴規模は、前者が直径63cmの円形で深さ55cm、後者が長軸65cm、短軸45cmの楕円形で深さ65cmである。

#### 2号竪穴住居址（図19・図版12-4）

1号住居址の下に掘り込まれている。南側1/3が1号住居址と重複する。床面が柔らかいため確認が遅れ、掘方みのみの検出となった。平面プランは、残存部と他の住居の例より2.2mの方形を想定している。主軸は東西方向である。残存する壁高は15cmである。柱穴は住居の周囲を廻る5個と住居内の1個を検出した。柱穴直径はいずれも30～35cmであり、深さは15～35cmとやや統一性を欠く。

#### 3号竪穴住居址（図20・図版12-5）

調査区東側中央付近に位置する。破壊を受け詳細は明らかではないが、2.0×1.7mの長方形のプランを想定している。主軸はW-4°-Nである。非常に小規模の住居である。残存する壁高は16cmである。柱穴は確認できなかった。

#### 4号竪穴住居址（図20・図版12-6）

3号住居址から約1mの距離をおいて南側に位置する。やはり破壊を受けており、詳細は明らかでない。2.5×2.3mの方形プランを想定している。主軸はW-10°-Sである。残存する壁高は20cmである。柱穴は東壁際に2個を検出した。直径20cm・深さ22cmのもの、長軸30cmの楕円形で深さ20cmのものである。3・4号ともに竈および炉跡は残存しない。

1. 工学部実験棟新営に伴う発掘調査

5号竪穴住居址 (図20・図版12-7)

調査区の東側中央部分、3・4号住居址の西に位置する。確認が遅れたことと、破壊を受けていることより、詳細は明らかではない。残存部より1.8×2.0mの小規模の住居を想定している。主軸はW-5°-Sである。残存する壁高は25cmである。柱穴は住居内中央に直径30cm、深さ25cmのものを1基、住居北壁際に直径30cm、深さ60cmのものを1個検出した。

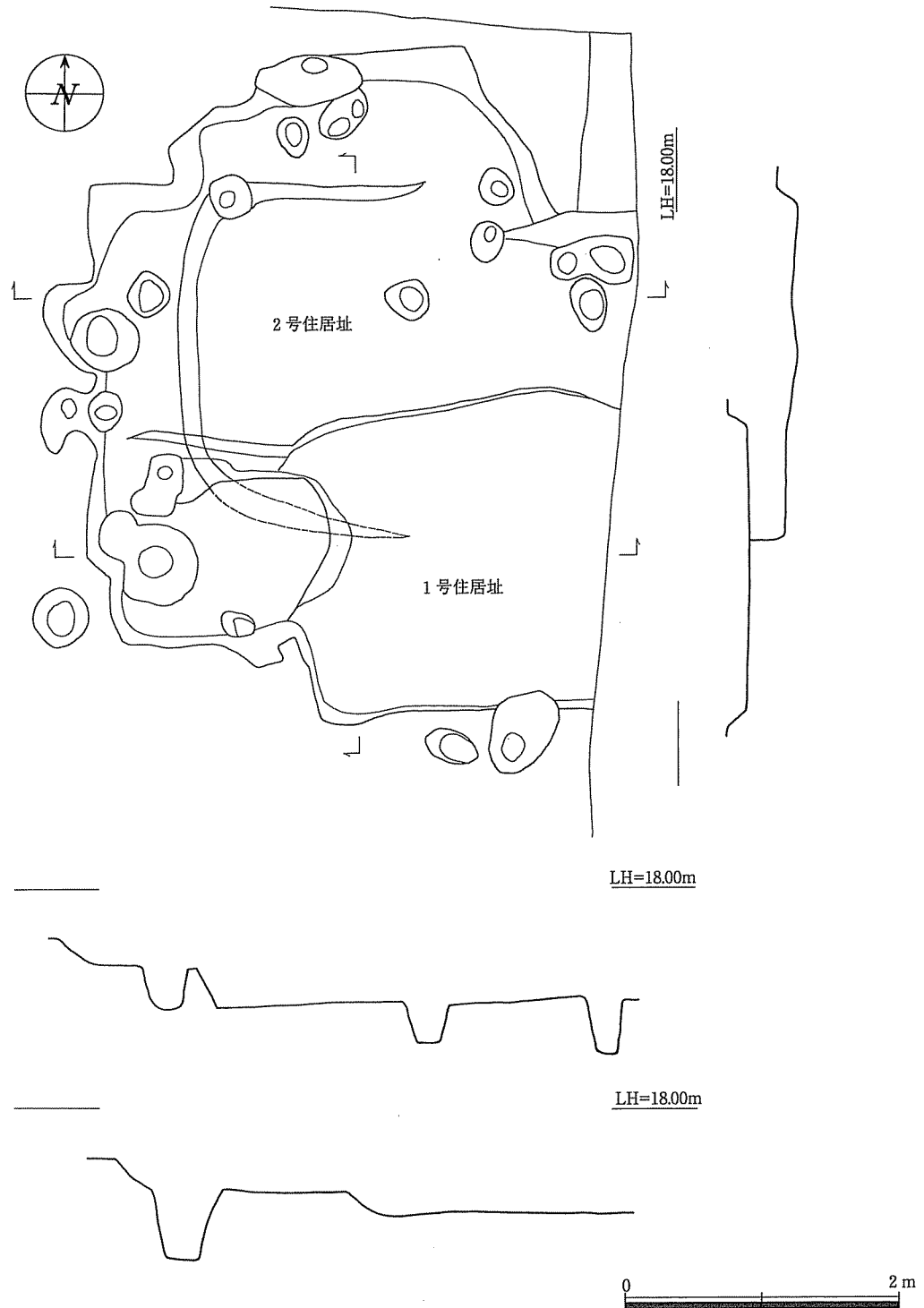


図19 1・2号竪穴住居址実測図 (1/50)

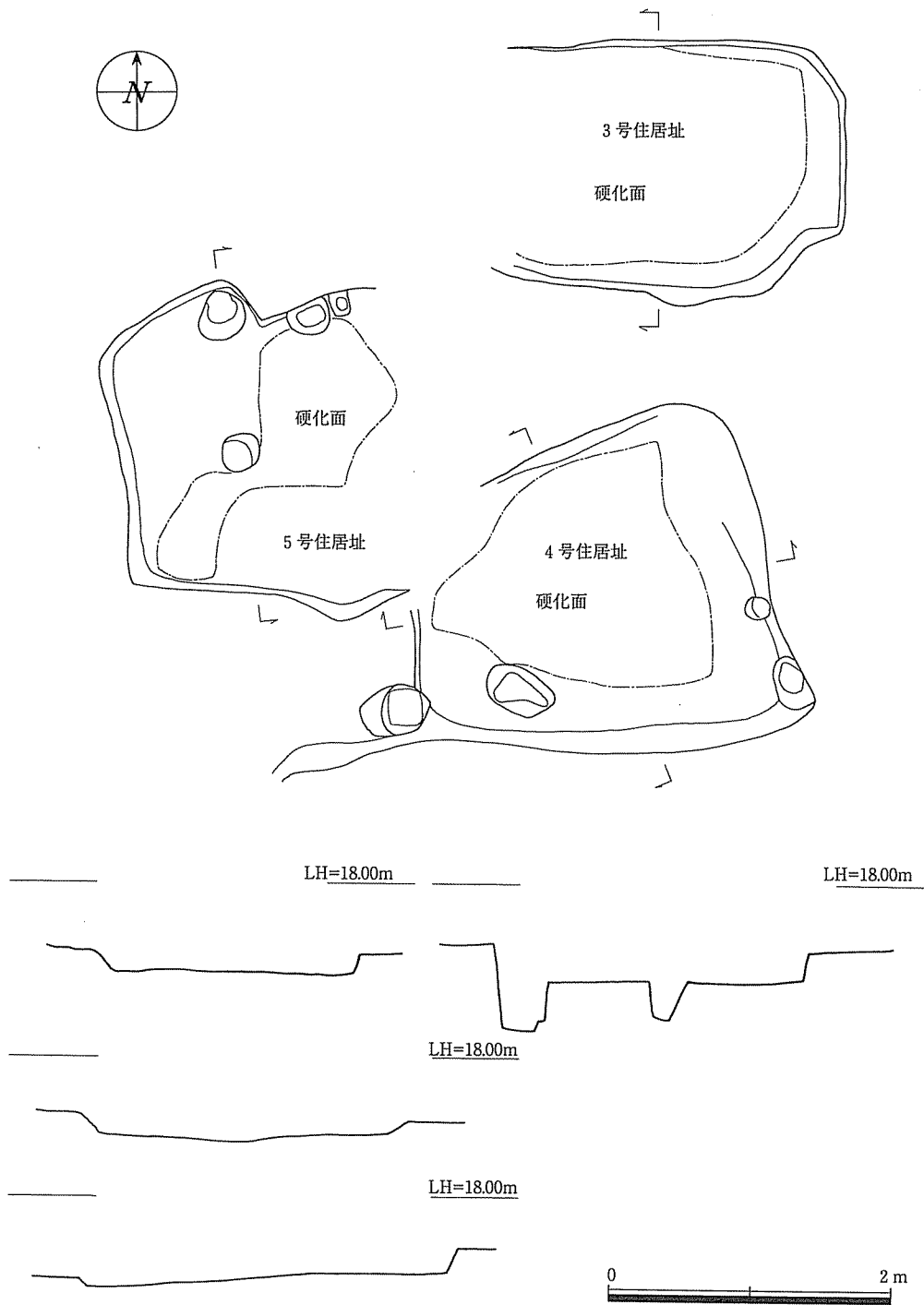


図20 3～5号竪穴住居址実測図 (1/50)

6号竪穴住居址 (図21・図版12-8・9)

調査区北側中央に位置する。平面形は2.5×2.4mの方形を呈する。主軸はW-4°-Sである。残存する壁高は35cmである。柱穴は住居壁に半分かかるような形で4個、いずれも直径20~25cmであるが、床面よりの深さ10~50cmとばらつきをもって検出されている。また住居外にも住居を廻るよ



1. 工学部実験棟新営に伴う発掘調査

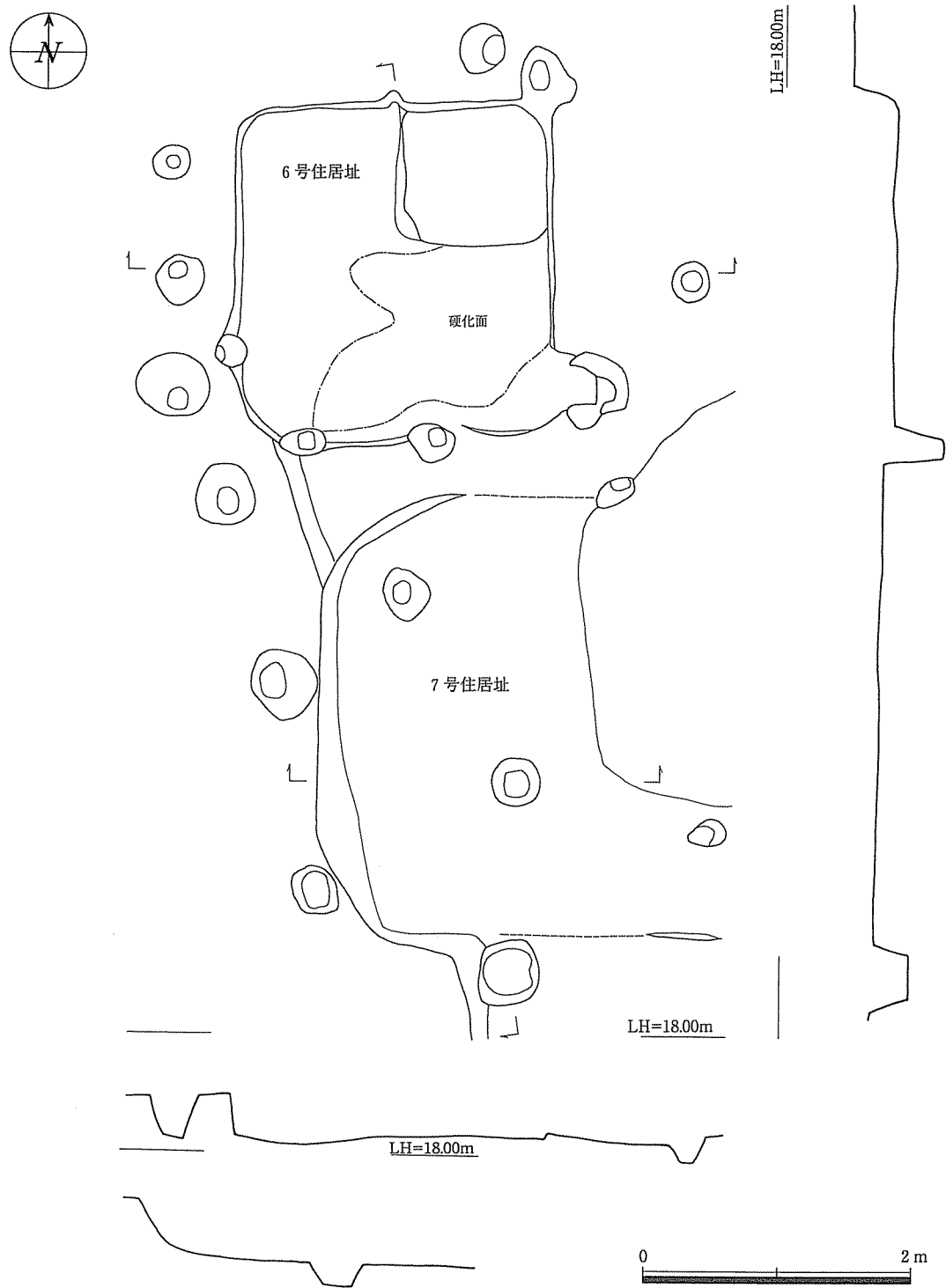
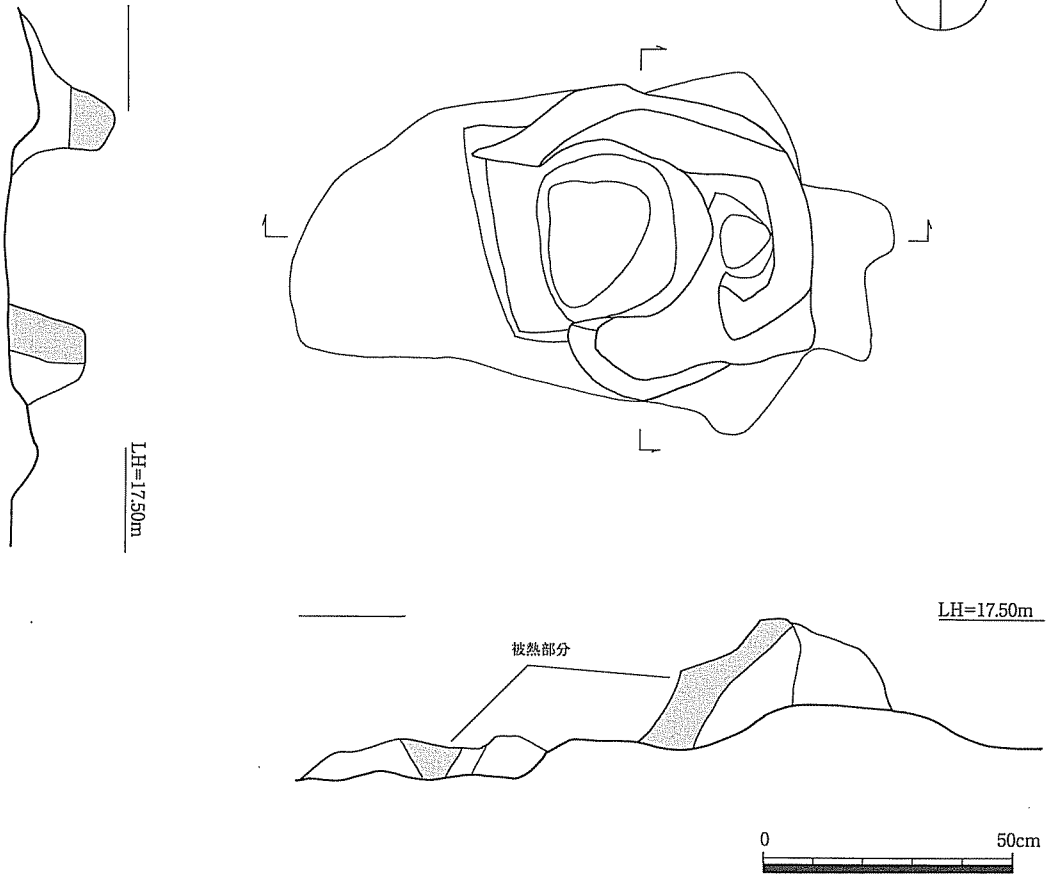


図21 6・7号竪穴住居址実測図 (1/50)

うに、直径30～50cmのピットを6個検出した。深さは35～65cmある。住居南東隅には竈が付設する(図22・図版12-9)。住居の壁体の一部を掘り込んで構築したものであり、竈壁体は粘土をもって作られる。幅100cm、長さ115cm、高さ50cm、焚口幅50cm、奥行55cmである。住居内北東隅に竈とは別に灰が集中する。1×1 mの正方形の範囲に広がっており、床面より5 cm程度高く段を形成する。

6号竪穴住居址竈



集石遺構

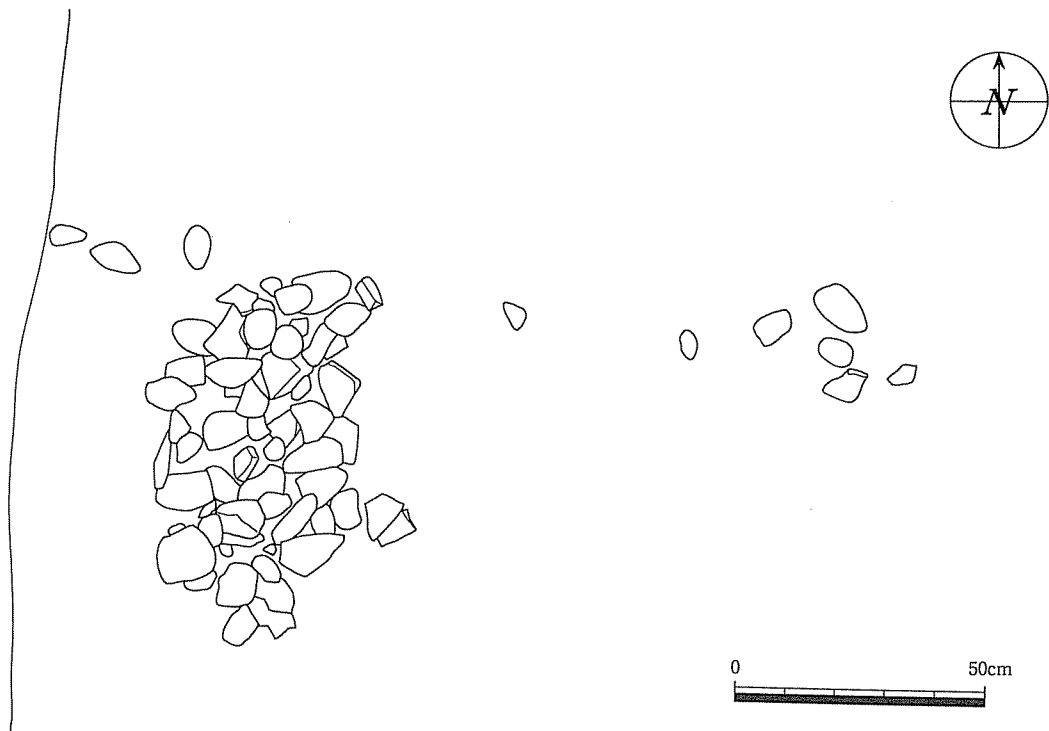


図22 6号竪穴住居址竈実測図・集石遺構実測図 (1/15)

## 1. 工学部実験棟新営に伴う発掘調査

灰の広がる面を除去すると、下には直径50cm、深さ20cmの円形のピットが存在する。ピット内には灰が多量に混入する土が充填されており、竈より排出される灰の廃棄場所であるいわゆる灰坑と考えられる。

### 7号竪穴住居址 (図21・図版12-10)

6号住居址との間に50cmの間隔をおいてすぐ南に存在する。東側の大部分が破壊を受けており、全容は明らかではない。西壁3.0mを確認している。主軸は東西に沿う。残存する壁高は35cmである。柱穴は住居壁際に相当する部分に2個、住居内に2個、住居外に3個を検出した。壁際のは長軸30cmの楕円形で深さ20~30cm、住居内のは直径40cmの円形で深さ30~35cmである。住居外には直径50cm、深さ30cmのもの2個、直径35cm、深さ35cmのもの1個をそれぞれ検出した。6号・7号を通じて柱穴の大きさにばらつきがある。これは住居内壁際に沿って細い柱を並べ、住居外に比較的太い柱を配置し、住居上屋部を支えたものと考えている。

### 溝状遺構 (図18・図版13-11)

溝状の掘り込みは調査区南半部において確認した。幅約3m、深さ60~80cmの逆台形状を呈する。調査区を横切るように東西に延び、現状では調査区西端付近でT字に分岐する。分岐点の西側は調査区外になるため、実際には十字、またはそれ以上に分岐する可能性も考えられる。溝底より靱殻が出土した(図版13-12)。遺構および遺物の密度が、この溝を境界として極端に異なる。溝内の堆積土は基本的にすべて火山灰土層である。遺物は少ない。本調査では古代の遺物のみしか出土していないが、周辺の一連の調査結果から、台地の地形変換点に掘られた近世期の堀である可能性が高い。

### 集石遺構 (図22・図版13-13)

溝状遺構の分岐点底部に5~10cm程度の河原石を集めた集石遺構を検出した。百数十個の石を積み、範囲は東西40cm、南北70cmの楕円状に広がる。石の間には須恵器・土師器片が混在する。集石の性格は判然としない。

## (4) 出土遺物 (図23・図版17)

出土遺物はパンケース30箱程である。遺構出土のものを中心に、時期比定可能なものと特記すべきものを抽出し紹介する。包含層からは近世の遺物も出土している。

### 1号竪穴住居址出土遺物

本住居址からは須恵器碗(1)、蓋(2)が出土している。いずれも破片である。5は1号住居址と2号住居址の間から出土した須恵器蓋である。また6の土師器鉢も同じところから出土した。

### 2号竪穴住居址出土遺物

7は須恵器碗、8・9は土師器の坏の破片である。土師器坏は赤いスリップがかかる。

### 4号竪穴住居址出土遺物

14・15は土師器の甕の口縁部片である。

### 5号竪穴住居址出土遺物

10は須恵器の碗である。高い器高に広い底部をもつ。

### 7号竪穴住居址出土遺物

12・13の土師器坏がある。12は回転ヘラミガキの坏で、赤いスリップがかかる。

### ピット・包含層出土遺物

16は13号ピットから出土した土師器甕、17は205号ピットから出土した須恵器坏である。見込みに「井」のヘラ書きがある。31は調査区北部の攪乱と接する部分にあったピット(図18参照)の埋土中

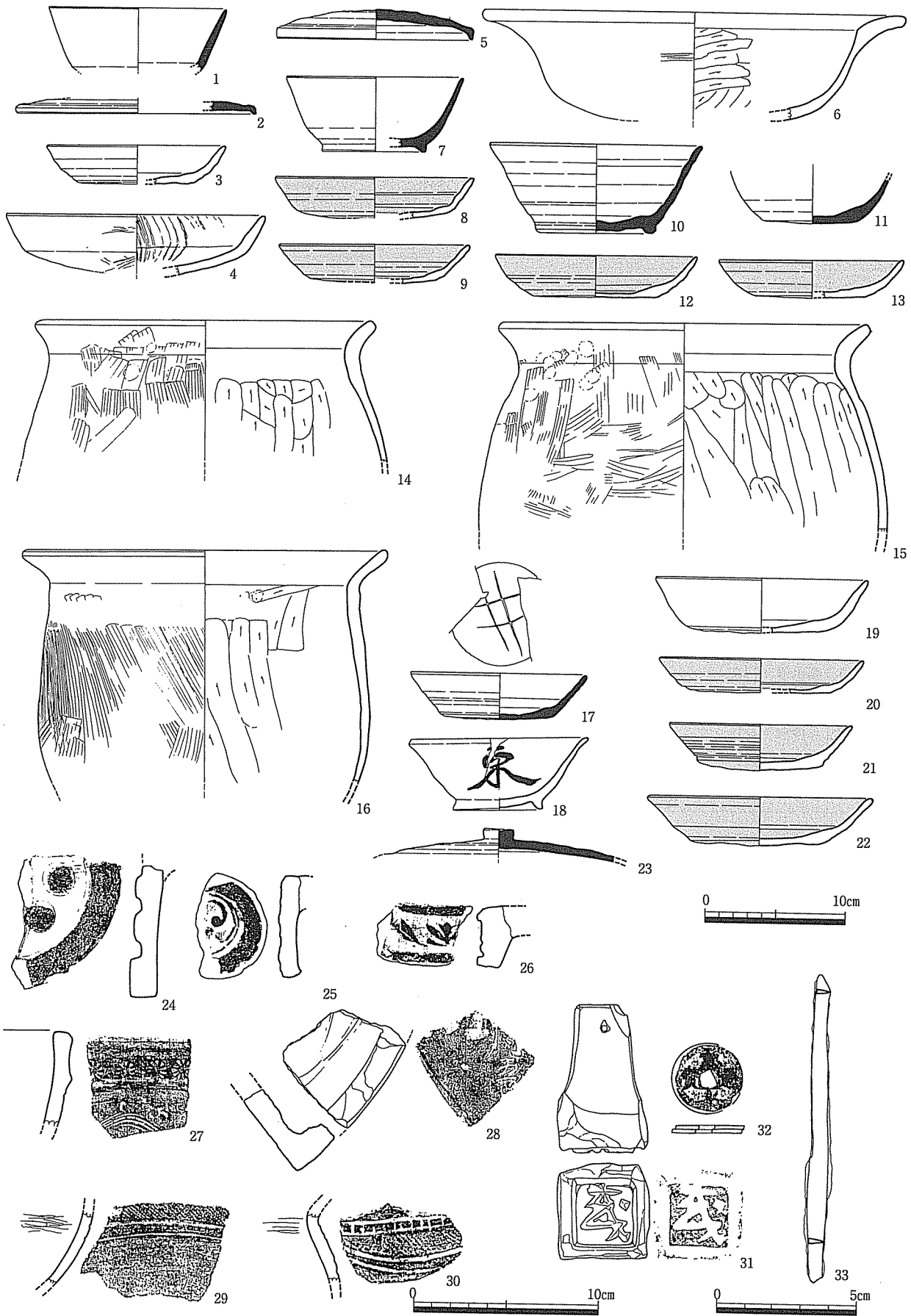


図23 9412調査地点出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2)

1. 工学部実験棟新営に伴う発掘調査

表4 9412調査地点出土遺物観察表

図	No.	遺物	種類(器種)	法量 (cm)	残存量	特徴	色調	出土遺構	備考
23	1	須恵器	坏(碗)	口径 12.6	口縁1/3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue5Y6/1 外:Hue10YR6/2	1号住居址	
	2	須恵器	坏蓋	口径 16.9	口縁1/5	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue5Y7/3 外:Hue5Y7/3	1号住居址	
	3	土師器	坏	口径 12.7 底径 7.8 器高 2.8	1/4	内:ヘラ磨き 外:磨き	内:Hue7.5YR7/4 外:Hue5YR6/6	1号住居址	煤付着
	4	土師器	高坏	口径 18.4	坏部口縁 1/4	内:ヘラ磨き 外:磨き	内:Hue10YR7/3 外:Hue10YR7/6	1号住居址	
	5	須恵器	坏蓋	口径 14.9 器高 2.15	1/3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue5Y7/1 外:Hue5Y7/1	1・2号住居址間	自然釉
	6	土師器	浅鉢	口径 30.0	口縁1/3	内:削り 外:ヘラナデ	内:Hue10YR7/4 外:Hue10YR6/3	1・2号住居址間	
	7	須恵器	碗	口径 12.5 底径 7.4 器高 5.4	1/4	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue7.5YR7/1 外:Hue7.5Y7/1	2号住居址	
	8	土師器	坏	口径 14.0 底径 11.0 器高 2.95	口縁1/4	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue2.5YR5/8 外:Hue2.5YR6/6	2号住居址	内外丹塗
	9	土師器	坏	口径 13.6 底径 8.8 器高 2.8	1/3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue7.5YR8/6 外:Hue3.5YR6/8	2号住居址	内外丹塗
	10	須恵器	碗	口径 15.2 底径 8.6 器高 6.4	1/3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue7.5Y8/1 外:Hue7.5Y7/1	5号住居址	
	11	須恵器	坏	器高 6.2	低部	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue7.5Y7/1 外:Hue7.5Y7/1	7号住居址	
	12	土師器	坏	口径 14.4 底径 9.0 器高 3.0	1/2	内:ヘラ磨き 外:ヘラ磨き	内:Hue5YR6/6 外:Hue5YR6/6	7号住居址	内外丹塗
	13	土師器	坏	口径 13.2 底径 8.0 器高 2.7	1/3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue5YR6/6 外:Hue5YR6/6	7号住居址	内外丹塗
	14	土師器	甕	口径 24.1	口縁1/6	内:削り 外:ハケ目	内:Hue2.5Y7/3 外:Hue10YR7/4	4号住居址	
	15	土師器	甕	口径 26.3	口縁1/4	内:削り 外:ハケ目	内:Hue10YR7/3 外:Hue10YR7/4	4号住居址	
	16	土師器	甕	口径 25.4 最大径 23.8	口縁1/4	内:削り 外:ハケ目	内:Hue10YR7/4 外:Hue10YR7/4	P13	
	17	須恵器	坏	口径 12.6 底径 8.0 器高 3.3	1/4	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue5Y6/2 外:Hue5Y6/2	P205	ヘラ記号格子
	18	土師器	碗	口径 12.6 底径 6.4 器高 5.1	完形	内:黒色磨研 外:ナデ	内:Hue N1.5/0 外:Hue10YR6/4		内黒・墨書「東」
	19	土師器	坏	口径 15.0 底径 8.2 器高 3.95	1/3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue10YR7/6 外:Hue7.5YR7/6	II層	
	20	土師器	坏	口径 14.6 底径 10.1 器高 2.45	口縁1/4	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue5YR6/6 外:Hue5YR6/6	II層	内外丹塗
	21	土師器	坏	口径 13.05 底径 9.0 器高 3.3	1/3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue5YR6/6 外:Hue5YR6/6	II層	内外丹塗
	22	土師器	坏	口径 16.1 底径 9.0 器高 3.5	1/4	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue5YR6/6 外:Hue5YR6/6	II層	内外丹塗・煤付着
	23	須恵器	坏蓋		天井部1/6	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:Hue7.5Y7/1 外:Hue7.5Y7/1	II層	

表4 9412調査地点出土遺物観察表

図	No.	遺物	種類(器種)	法量 (cm)	残存量	特徴	色調	出土遺構	備考	
23	24	瓦	軒丸・瓦当	直径 16.0 厚さ 1.7			表：Hue5Y5/1 裏：Hue5Y5/1	Ⅱ層	珠文	
	25	瓦	軒丸・瓦当	直径 3.4 厚さ 1.45	1/2		表：Hue7.5Y5/1 裏：Hue7.5Y5/1	Ⅱ層	左巴文	
	26	瓦	軒平・瓦当	幅 4.0 厚さ 2.25	1/4		表：Hue2.5Y7/2 裏：Hue2.5Y7/2	Ⅱ層	均整唐草文	
	27	瓦器	火舎			口縁部片	内：Hue7.5Y5/1 外：Hue7.5Y5/1	溝		
	28	瓦	軒丸・瓦当?	厚さ 1.65	1/4		表：Hue5Y4/1 裏：Hue5Y4/1	Ⅱ層	文字あり	
	29	縄文土器	(深)鉢形土器			胴部片	内：磨き 外：擦消縄文	内：Hue10YR4/3 外：Hue7.5YR6/4	Ⅱ層	
	30	縄文土器	(深)鉢形土器			胴部片	内：磨き 外：擦消縄文・刺突文	内：Hue5YR5/1 外：Hue10YR5/4	Ⅱ層	
	31	土製品	印	長さ 5.34 幅 3.26 厚さ 3.45	完品		Hue10YR7/6	ピット	「國」	
	32	銅製品	銅銭 (2枚)	直径 2.45 厚さ 0.15				包含層	1枚は寛永通宝	
	33	鉄製品	鉄鏃	長さ 11.1 幅 0.68 厚さ 0.3				包含層		

位から出土した土製印である。粘土を堅く焼き締めたものを整形し、彫刻刀のような工具で陰刻を施している。大きさは全長53mm・使用面34×32.5mmである。使用面は角がとれ破損しているが、「口」（くにがまえ）のあった痕跡があり、恐らく「國」の正字と考えられる。把手部分には径2mmの穿孔がなされている。

18は内黒碗であり、外面に「東」を墨書する。23は須恵器蓋、19～22は土師器坏である。24～25は近世以降の瓦である。巴文と草花文が施される。27は瓦質火舎である。28は瓦当と思われるが、裏面に「月カ五」の文字が見える。32は寛永通寶銅銭が2枚重なったものである。29・30は縄文時代後期の磨消縄文系深鉢形土器の胴部と肩部の破片である。33は鉄鏃である。包含層（2層）から出土した。

## 2. 工学部研究実験棟共同溝建設工事に伴う発掘調査（9501調査地点）

### （1）調査の目的と経過

#### a. 調査地と調査経緯

工学部研究実験棟の共同溝を設営するために、発掘調査を実施した。実験棟の東側の道路部分に相当する。幅6m、長さ14mにわたって調査を実施した。

#### b. 調査の経過

4月25日 重機による表土除去。遺構検出。

4月27日 1号溝掘削。近世以降の堀であることを確認。平行して遺構実測。

4月28日 遺構掘下げ。住居址確認。

2. 工学部研究実験棟共同溝建設工事に伴う発掘調査

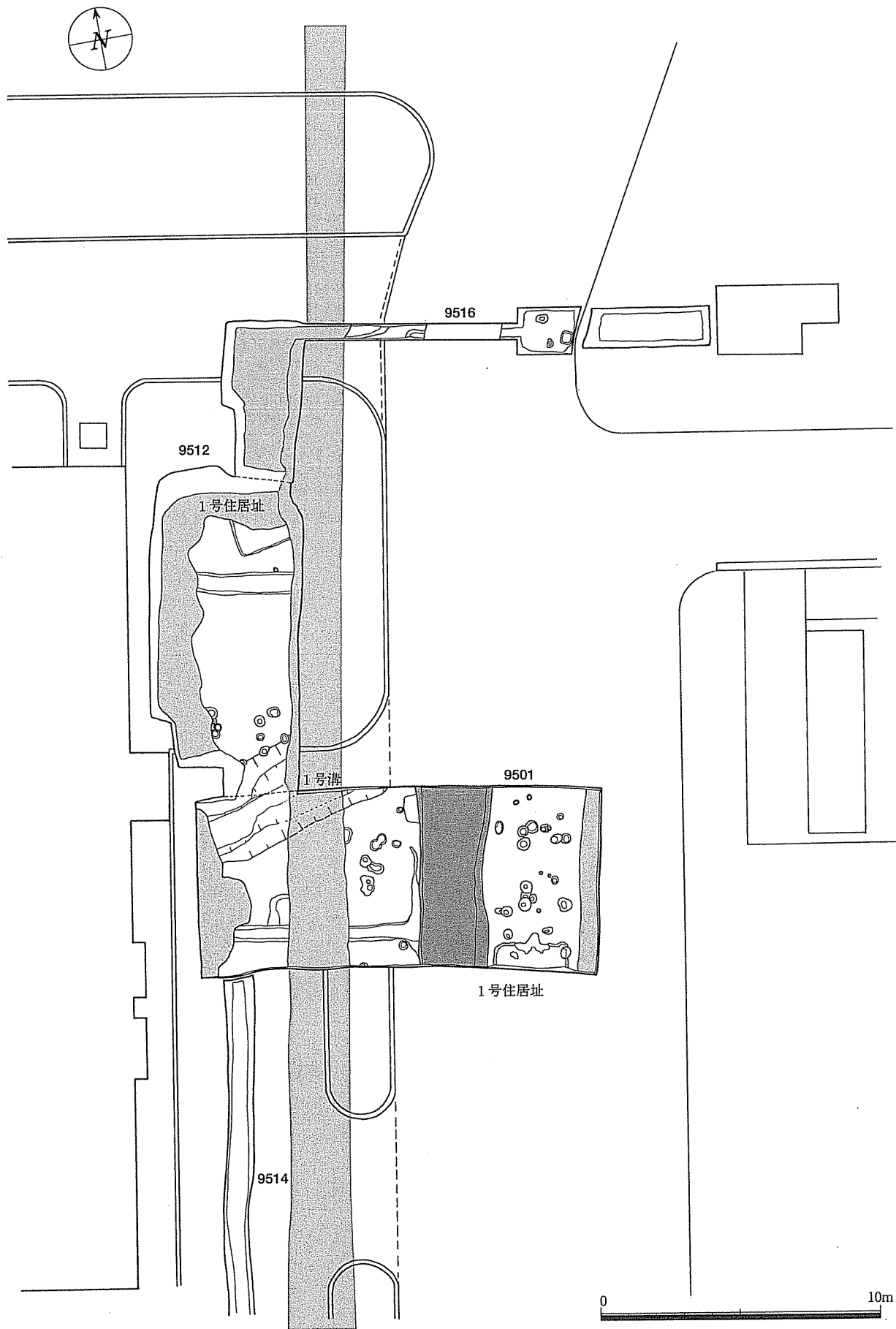


図24 9501・9512・9514・9516調査地点遺構配置図 (1/200)

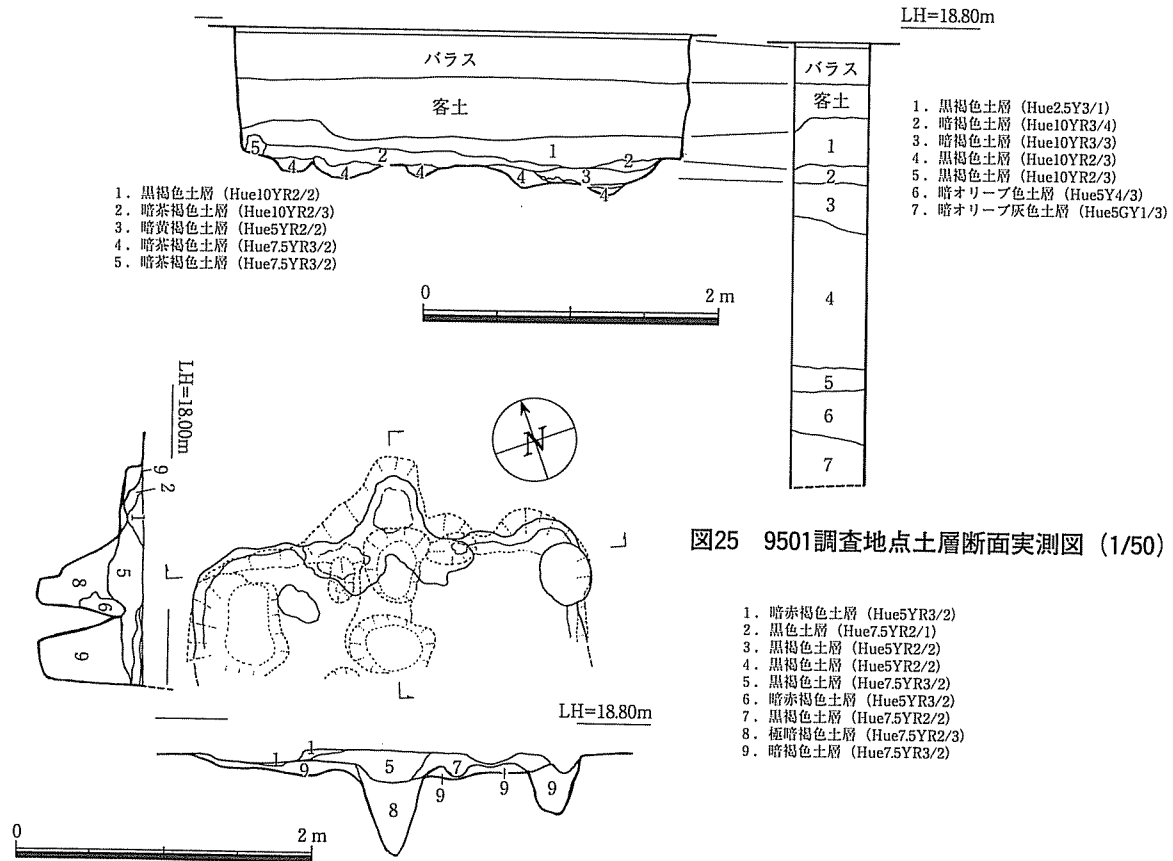


図25 9501調査地点土層断面実測図 (1/50)

- 1. 暗赤褐色土層 (Hue5YR3/2)
- 2. 黒色土層 (Hue7.5YR2/1)
- 3. 黒褐色土層 (Hue5YR2/2)
- 4. 黒褐色土層 (Hue5YR2/2)
- 5. 黒褐色土層 (Hue7.5YR3/2)
- 6. 暗赤褐色土層 (Hue5YR3/2)
- 7. 黒褐色土層 (Hue7.5YR2/2)
- 8. 極暗褐色土層 (Hue7.5YR2/3)
- 9. 暗褐色土層 (Hue7.5YR3/2)

図26 9501調査地点1号住居址実測図 (1/50)

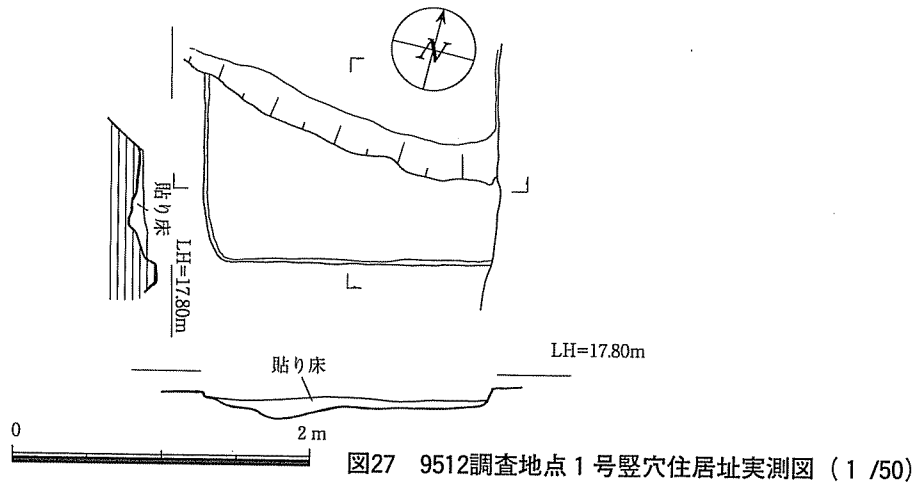


図27 9512調査地点1号竪穴住居址実測図 (1/50)

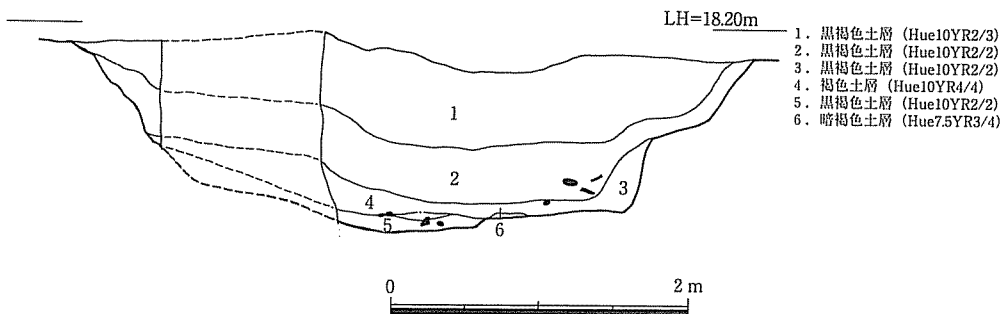


図28 9501調査地点1号溝土層断面実測図 (1/50)



### 3. 工学部研究実験棟貯水桝建設工事に伴う発掘調査

5月2日 住居址土層断面、竈断面実測。調査終了。

#### c. 調査の組織

調査員：小畑弘己

事務担当：矢野希久代

発掘作業員：飯田孝俊・今村佳子・大坪志子・原田範昭・東真一

整理作業員：古賀敬子・藤岡泰江

#### (2) 調査区の基本層序 (図25)

調査区の大部分を占める道路部分の土層の堆積状況は、道路の基盤土である砂層直下に遺物包含層である黒褐色 (2.5Y3/1) 土層 (厚さ20cm) が堆積している。その下は暗褐色 (10YR3/4・3/3) の火山灰土となり、この面で遺構を検出した。調査終了後の工事による掘削断面の観察によると、この暗褐色火山灰土層は厚さ30cmほどで、その下部は厚さ1 mほどの黒褐色 (10YR2/3) 土層へと移行する。この層の下部にはスコリアが混じり、以下砂礫層となる。

#### (3) 検出遺構

##### 1号溝 (図24・図版15-7)

調査区の北西部で検出した溝である。この溝は実験棟本体の調査 (9412) の際検出された1号溝状遺構と接続する可能性が大きい。調査区をかすめるため、幅については建築工事掘削の壁面で確認した。その後、貯水桝工事ともなう発掘調査 (9512調査地点) において北壁部分を調査することができた。断面形が台形を呈し、その幅は溝底部で2.5m、検出面で4 mである。溝の方位は東西方向よりやや北に振れる。溝中の堆積土は5層に分けられ、上から1層-黒褐色土 (厚さ60cm)、2層-黒褐色土 (40cm)、3層-黒褐色土 (20cm)、4層-褐色土 (8 cm)、5層-暗褐色土 (10cm) である。5層と4層の間には拳大の礫が挟まる部分があり、この基底部 (5層上面) に粘質の褐色土層 (4層) が薄く堆積している (図28)。これらの層は水成の堆積土であり、溝底はわずかに水が流れる状態であったことが推定される。出土遺物は1層から3層までは18世紀後半以降の近世陶磁器および陶器を主体とするが、4層は古代の須恵器や土師器を多く含む。

##### 1号竪穴住居址 (図26・図版15-3・4)

調査区南東隅に約半分を検出した。検出部分での幅は2.5mである。北辺中央部に竈の混戦木をもつ。壁の残りはわずかで、15cmしか検出できなかった。竈は中央に若干の焼土と白色粘土の混じる土が残るのみで、明確な壁の立ちあがりや焚口なども検出できなかった。焚口に相当する部分には直径40cm、深さ70cmの穴があり、防湿を意図した掘りこみとも考えがたく、時期の異なる遺構の可能性が高い。しかし、土層観察において上部より切り込んだ痕跡は認められなかった。出土遺物としては土師器・須恵器の坏や甕などの小片が少量出土した。

### 3. 工学部研究実験棟貯水桝建設工事に伴う発掘調査 (9512調査地点)

#### (1) 調査の目的と経過

##### a. 調査地と調査経緯

工学部研究実験棟北東角にあたり、一連の外溝工事ともなう立会調査を実施していたところ、地表下80cmに保存状態のよい遺物包含層を検出した。また、1994年度調査において旧建物の基礎があ

り、埋蔵文化財はすでに破壊されていると判断した地点まで、破壊を免れて広がることが判明し、建設中建物の基礎用の掘削部分間際まで範囲を広げ発掘調査に切り替えた。調査は2日間を要した。遺物包含層まで機械力によって掘削し、表土および攪乱層を除去した後、人力による包含層の調査を開始した。遺物包含層の下の黄褐色土上面において、遺構を検出した。その結果、竪穴住居址1基、溝1条、柱穴（根穴）数個を発見した（図24）。

**b. 調査の経過**

11月13日 貯水槽設置のための立会調査中、包含層が残るため発掘調査に切替。

11月15日 表土剥ぎ。遺構検出。

11月16日 1号溝掘り上げ。1号竪穴住居址床面状態実測。掘り上げ状況実測。全体測量。終了。

**c. 調査の組織**

調査員：小畑弘己

事務担当：矢野希久代

発掘作業員：飯田孝俊・今村佳子・大坪志子

整理作業員：古賀敬子・藤岡泰江

(2) 調査区の基本層序

土層の堆積状況は、ほぼ9501調査地点と同じであるが、遺物包含層の上に淡茶褐色の土層が堆積している。これは近世以降の遺物を含む層である。

(3) 検出遺構

**1号竪穴住居址（図27・図版16-2・3）**

調査区北隅で検出した竪穴式の住居址である。北半は攪乱によって破壊されている。残存部の1辺の長さは2mである。検出面が低かったため、壁の残り具合は悪く、5cmほどである。床を精査したが残存部分において柱穴らしき痕跡は認められなかった。出土遺物は内面に削り痕のある土師器2片があるのみである。時期は周辺の状況から古代であろう。

**1号溝（図版16-4）**

共同溝建築部分（9501調査地点）において検出した溝の北壁部分に相当する。深さ1.4mほどである。土層の堆積状況や出土遺物の性格も上記溝の所見に一致する。

(4) 出土遺物（図29）

1～4は9512調査地点から出土した縄文時代後期末の深鉢形土器の口縁および粗製深鉢形土器の口

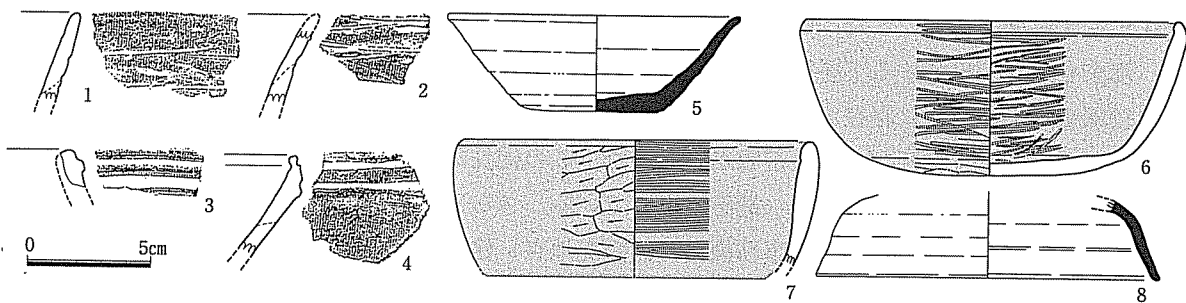


図29 9501・9512調査地点包含層出土土器実測図（1/3）

4. まとめ

表5 9501・9512調査地点出土遺物観察表

図	No.	遺物	種類(器種)	法量 (cm)	残存量	特徴	色調	出土遺構	備考
29	1	縄文土器	深鉢形土器		口縁部片	内：ナデ 外：ナデ	内：褐色～暗褐色 外：褐色～暗褐色	包含層	
	2	縄文土器	深鉢形土器		口縁部片	内：ナデ 外：ナデ	内：茶褐色 外：茶褐色	包含層	
	3	縄文土器	深鉢形土器		口縁部片	内：磨き 外：黒色磨研	内：茶褐色 外：茶褐色	包含層	
	4	縄文土器	浅鉢形土器		口縁部片	内：磨き 外：黒色磨研	内：暗褐色 外：暗褐色	包含層	
	5	須恵器	坏蓋	口径 13.95	1/8	内：ナデ 外：ナデ・ヘラ 削り	内：Hue5Y6/1 外：Hue5Y6/1	II層	
	6	須恵器	坏	口径 11.95 底径 5.2 器高 3.9	1/4	内：ナデ 外：ナデ	内：Hue5Y6/2 外：Hue5Y6/2	II層	
	7	土師器	鉢	口径 15.15 底径 7.6 器高 6.3	2/3	内：ヘラ磨き 外：ヘラ磨き	内：Hue2.5YR5/6 外：Hue2.5YR5/6	II層	内外丹塗
	8	土師器	鉢	口径 14.65	口縁部片	内：ヘラ磨き 外：ヘラ磨き	内：Hue2.5YR5/6 外：Hue2.5RY4/6	II層	内外丹塗

縁部片である。5は須恵器の坏、6・7は丹塗り磨研の坏、8は須恵器の蓋である。5～8は9501調査地点の包含層から出土した。

#### 4. まとめ

この94・95年度に実施した黒髪南地区における調査は、ほぼ南地区の中央部の東側一帯に集中し、工学部研究実験棟建設地の発掘調査(9412)地点を中心にその周辺を調査した状況となった。その結果、当地点の中心となる遺構群の形成時期は、出土遺物よりみて8世紀後半に比定できた。この時期の遺構はその規模がほぼ2m四方の方形竪穴住居址であり、これらが散漫ではあるが調査区内に満遍なく広がる様子を把握することができた。調査区が断片的であることと、破壊が著しいため、同時期の掘立柱建物群は検出できていないが、おそらくその後に行った周辺地の調査からみて、セットとしてこれらに倉庫としての高床建物が伴う可能性が高い。この地点の古代における性格は、遺構のあり方からみて、官衙域ではない一般的な集落を想定せざるを得ないが、9世紀前半ごろの「東」銘の墨書土器、さらに図示していないが、9412調査地点から「飯」銘のヘラ書きをもつ土師器坏が出土していること、さらに「國」銘の土製印が存在することは、周辺に識字層の存在を窺わせ、農民だけが居住する農村域でないことだけは確かである。この地域も蚕養駅関連の施設の周辺部にあたることから、郡家や駅家へ出仕する下層役人の居住区であった可能性が高い。

9412調査地点の南側に存在する堀は、台地の地形変換点(端部)にあたり、9501・9512調査地点で北側へ迂回するように延びることが明らかになった。この延長は、その後実施した理学部の自然研究棟建設にかかわる発掘調査でもその一端を検出している。さらに、この溝の弧状の西側の一端は、工学部研究棟(9603調査地点)および事務棟(9704調査地点)建設に先立つ発掘調査で確認されている。これは台地周辺を巡る堀であり、これを南へ下ると急に地形が低くなる。江戸後期の掘削と思われる。